

## 古事記の小碓の命

古典に書かれたエネルギー資源

土屋 晋

古典文学というと、平家物語、枕草子、源氏物語などを思い出す人が多いだろう。日本語ではあるが、文語文で書かれ、親しみにくい。何故国語の時間にこんなものを勉強しなければならないのだろうか、と思った人は多いだろう。特に理系人間の多くは、「大学入試対策以外に、将来何の役に立つのだろうか？」と疑問に思った人も多いことだろう。

それはさておき、古事記の話である。小碓の命（おうすのみこと）が焼遣（今の静岡県焼津）の地に入ったとき、土地の国造の家来によって野に火をつけられて焼き殺されそうになったという話が伝えられている。「小碓の命の東伐の話」である。野火が迫り来たので、命は草を刈り、火打ち石で火をつけたところ、火は反対に国造の家来の方向へ燃えてゆき助かった、というのである。

何故この話が伝えられているのだろうか？本当は何を伝えたいのであろうか？枯れ草のような燃えるものがあれば、燃えながら火は迫ってくるだろうが、燃える物が無くなれば、その後は火がくることはないだろう。したがって燃える物が無くなれば安全である。向こうから燃えてくる火に対

して、こちらからつけた火（向かい火）を、ほそけ（火退け）というそうで、ふるくから、一応そのように解釈されている。

しかし火は、逆に国造の家来の方に燃えていったのである。何故だろうか？木ならば、いったん炎を出して燃えた後でも炭状の物が残り、さらに燃え続けることはあるだろう。しかし草は、特に枯れ草は、いったん燃えたならばすぐ灰になってしまい、また再び燃えることは極めて考えにくい。だとすると、そこには、まだ燃える物、燃える何かが残っていたのではないか。あるいはいったん燃えた後、新たに燃える物が補充され、それが燃えたのではないか、と考えられないだろうか。もしそうだとしたら、その燃えたものは、一体何だったのだろうか？謎ではなかろうか。

ずっと時代は下るが、あの近くには昔から石油が出る場所があった。ただ出る量はそれほど多くはなかったが、長年にわたり人々は、その石油を利用していた。したがって古事記の話は、もしかすると、枯れ草の燃えたあとに燃えた物は、あとで地面からしみ出してきた石油だったのではなかろうか？枯れ草が燃えたことにより、地面

が暖められ石油が気化して燃えやすくなっていたのかもしれない。そうは考えられないだろうか？

東北北関東大地震により、福島県の原子力発電所が大きな被害を受け、発電所としての役割が果たせなくなってしまった。さらに菅総理は、福島県以外の太平洋側にある数カ所の原子力発電所の運転停止を命じた。静岡県の浜岡原発も運転を停止した。

国民の安全の見地からは、それなりに納得のゆく措置ではあるが、発電量は減少したので、当面はなんとかしのげるであろうが、中期的には不安が残ることである。長期的には発電量確保、さらには発電量の増加が求められるようになるであろう。

発電所には、原子力発電所のほかに、水力発電所、火力発電所、風力発電所、潮汐発電所などがある。原子力発電所をやめた場合、当然の事ながら、その代替発電所を考えなければならない。このうち火力発電所以外は、その設置に際し種々の自然的地理的条件が加わり自ずと設置場所は限られてくる。したがって、いずれは火力発電所の重要性が強調されるようになるであろう。

以前は、火力発電所といえば石炭火力発電所であった。石油を燃料とするようになったのは近年である。現在でも国によっては、石炭火力発電所が稼働しているところ

は多い。しかし火力発電所の燃料は、何も石油や石炭に限ることはない。静岡県浜松沖の海底には、膨大な量のメタンハイドレートがある。メタンハイドレートは、メタンと水が結合してシャーベット状になったもので、化学構造的に言えば、水分子が籠状に結合した内部に、メタン分子が閉じ込められた構造になっている。つまり固体状の低級炭化水素である。そろそろ、この利用を検討すべき時期ではなかろうか。最近鉱山関係の方から、工業技術院も本格的調査を始めたと同だったので、期待している。なおメタンハイドレートは、日本以外にも、たとえばシベリアの凍土地帯などでも発見されている。

先般菅総理は浜岡原発停止を決めたが、古事記の話が総理の脳裏にあったかどうかは、わからない。むしろ、かつて炭鉱からの石炭採掘が盛んだった宇部出身であることを考えると、単に「原子力がだめならば石炭を使えばよい」と考えているだけなのかもしれない。しかし、官僚はすでに先を考えているようで、「頼もしきかな」と思ったことである。